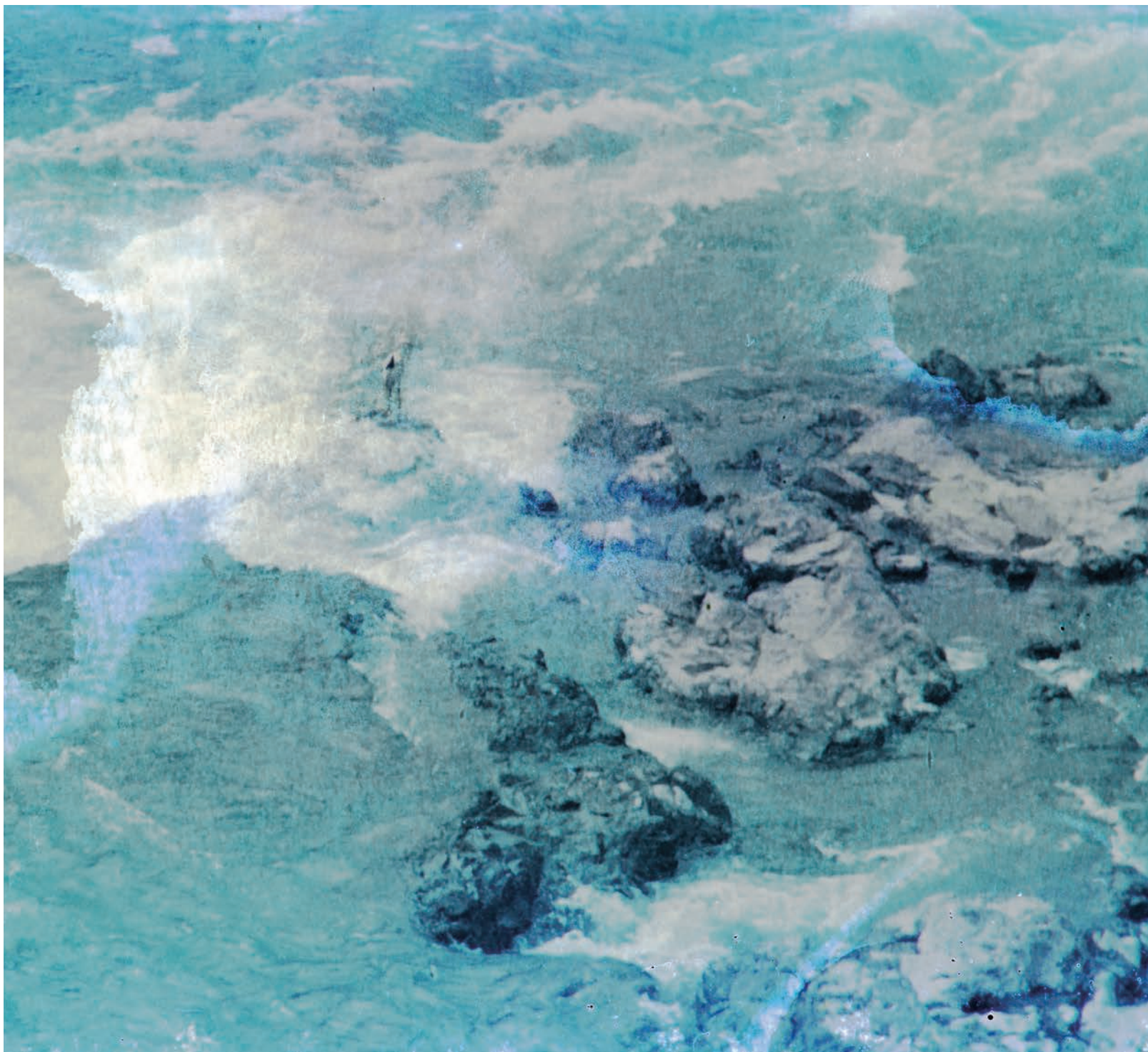
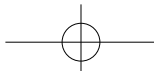
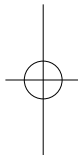
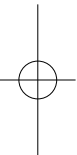
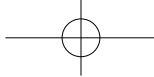
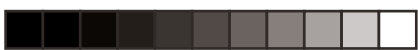


REBORN







令和2年7月豪雨

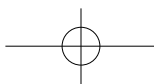
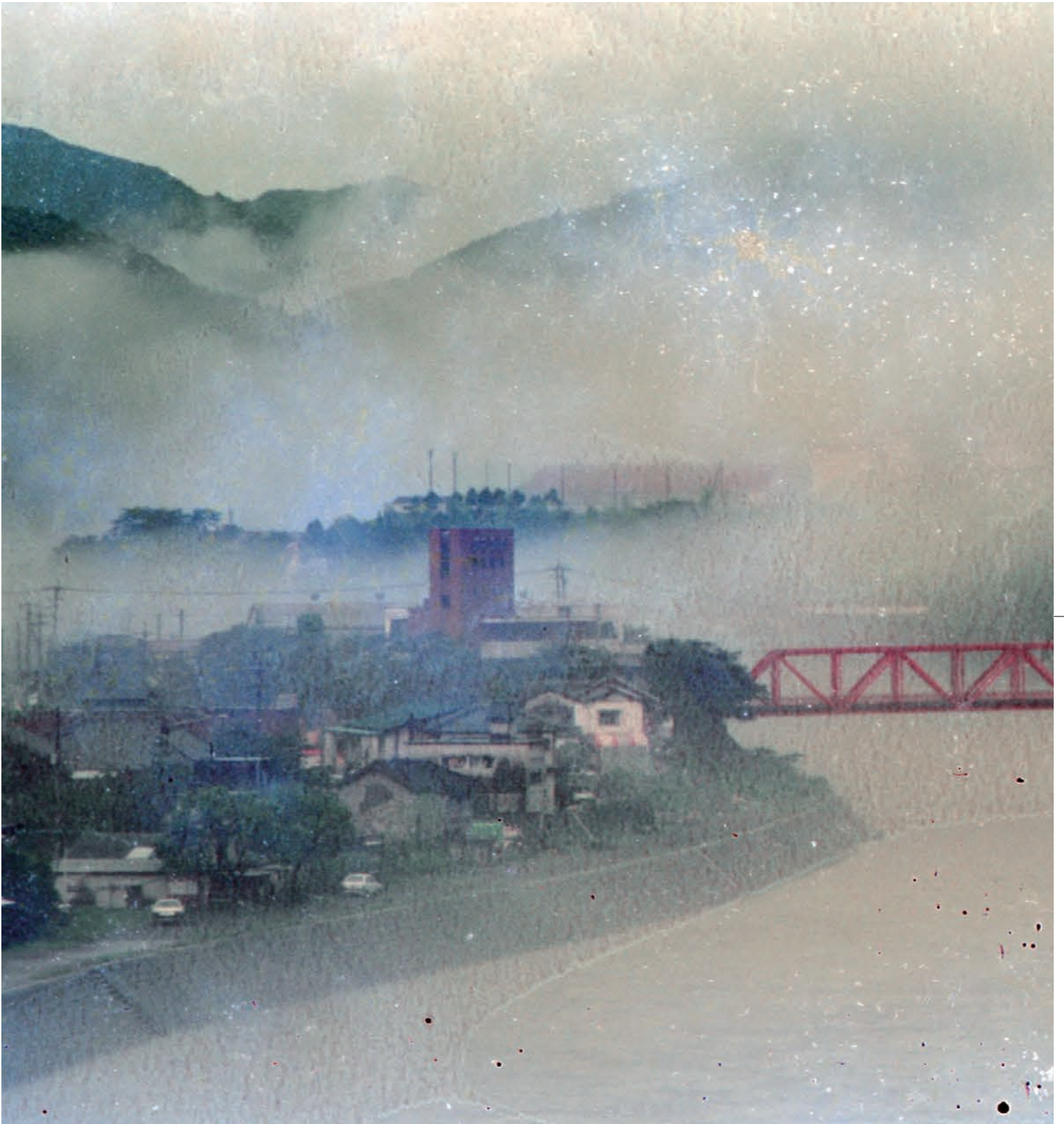
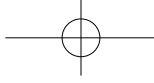
REBORN

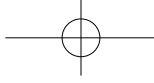
プロジェクト

REBORNプロジェクトとは、令和2年7月豪雨で水損した八代市坂本町に残る古いネガフィルムをクリーニングの上、デジタル化し保存する活動です。さらにその写真を展示や冊子などの形にすることで、坂本という土地の記憶を共有し、その再生(REBORN)を目指すものです。

これらのネガや写真は、地元アマチュア・カメラマン、故・東儀一郎氏、本村孝夫氏らが撮影したもので、昭和20年代後半～平成初期までの旧坂本村などの様子が写し出されています。同町でラフティング会社「Reborn」を営むリバーガイド・溝口隼平氏が資料として譲り受け、整理・保管してきました。

しかし、今回の水害でその多くが水没したことをきっかけに、有志による「ボランティアグループあめつち」が立ち上がり、レスキュー作業にあたってきました。これらの写真には、経年劣化及び水害時の影響であるだろうと思われる、退色、ネガの乳剤剥げ、残った紙繊維などがありましたが、あえてそのままの状態プリントし、掲載しています。



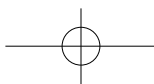


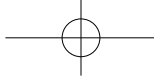
219号線から坂本町の中心部へ続く坂本橋。
令和2年7月豪雨にて流出。水損の激しかった
35mmカラーネガフィルムのデジタル
データ

撮影年月日不明、坂本
撮影：東儀一郎氏

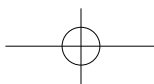
The Sakamoto bridge connecting the city center
and Route 219, swept away by the flood in July
2020. A digitized image of a damaged 35mm
color negative film.

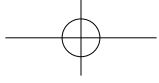
Sakamoto, date unknown
Photo : Giichiro Higashi





人吉市から出発する球磨川下り
撮影年月日不明、人吉市
撮影：東儀一郎氏
Rafting the Kuma river departing from Hitoyoshi
Hitoyoshi City, date unknown
Photo : Giichiro Higashi

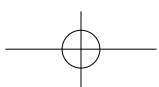


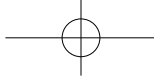


昭和 29 年 4 月中旬、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, mid-April 1954
Photo : Takao Motomura



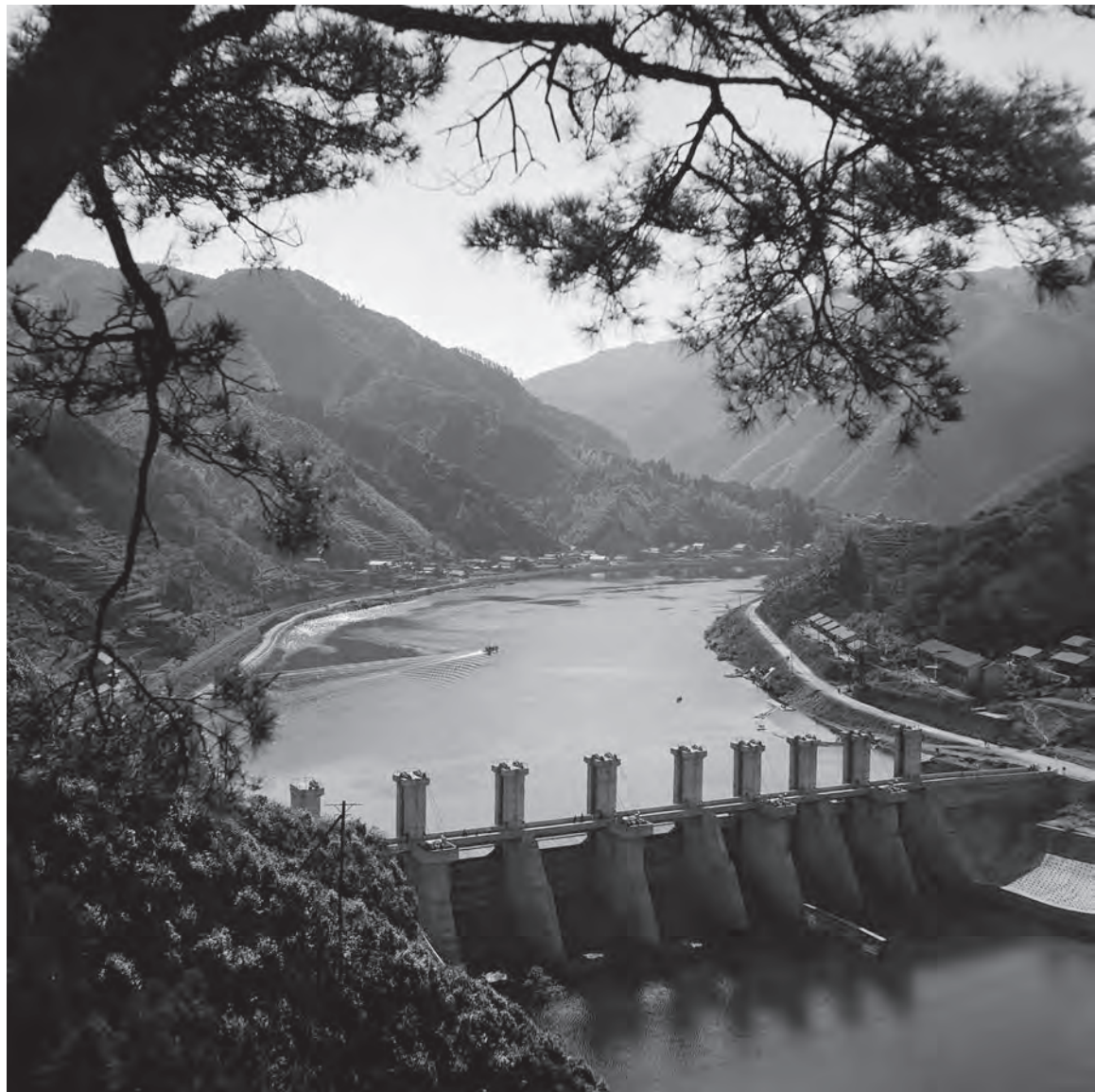
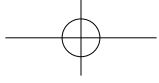
昭和 29 年 4 月中旬、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, mid-April 1954
Photo : Takao Motomura





荒瀬ダム完成直後、ダム湖左岸で陸揚げされる
球磨川流域最後の筏流し
昭和30年前後
撮影：本村孝夫氏

The Final timber rafting in the Kuma river basin to
be unloaded at the left bank right after
the Arase Dam construction.
Around 1955
Photo : Takao Motomura



左岸下流の山腹から眺める荒瀬ダム

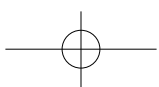
昭和 29 年 12 月 27 日

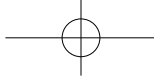
撮影：本村孝夫氏

Arase Dam, viewed from a mountainside on the lower stream at
the left riverbank.

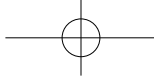
December 27, 1954

Photo : Takao Motomura

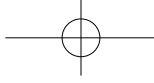




水没する破木集落
嵩上げ工事のための解体中の定点写真
昭和30年1月、破木
撮影：本村孝夫氏
Sinking Hagi village.
A series of a dismantling village to raise the riverbank.
Hagi, January 1955
Photo : Takao Motomura



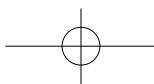
昭和 30 年 3 月 7 日、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, March 7, 1955
Photo : Takao Motomura

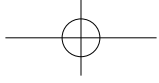


嵩上げ工事の固め作業
昭和30年9月5日・8日、破木
撮影：本村孝夫氏
Stabilization to raise the riverbank.
Hagi, September 5 and 8, 1955
Photo: Takao Motomura



昭和30年9月5日・8日、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, September 5 and 8, 1955
Photo: Takao Motomura

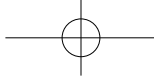




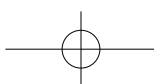
昭和 30 年 9 月 6 日、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, September 6, 1955
Photo : Takao Motomura

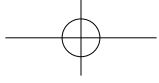


上棟宴会
昭和 30 年 9 月 6 日、破木
撮影：本村孝夫氏
A framework-raising party of a
house.
Hagi, September 6, 1955
Photo : Takao Motomura



昭和30年11月、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, November 1955
Photo : Takao Motomura

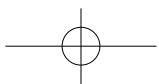


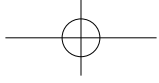


昭和30年9月8日、破木
撮影：本村孝夫氏
Hagi, September 8, 1955
Photo : Takao Motomura



建築中の荒瀬ダムの前で記念撮影
撮影年月日不明、荒瀬
撮影者不明
A group photo in front of the Arase Dam,
under construction.
Arase, date unknown
Photo : unknown





荒瀬ダム建設現場集合写真

昭和 28 年 9 月 2 日

撮影：本村孝夫氏

Group photo at the Arase Dam construction site.

September 2, 1953

Photo : Takao Motomura



基礎打ちの現場にて

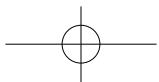
昭和 30 年 11 月 10 日、破木

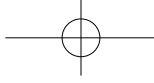
撮影：本村孝夫氏

At construction of house foundations.

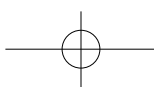
Hagi, November 10, 1955

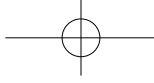
Photo : Takao Motomura



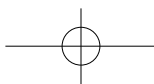


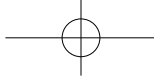
中谷橋付近
撮影年月日不明
撮影：東儀一郎氏
Near Nakatani Bridge
Date unknown
Photo : Giichiro Higashi



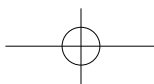


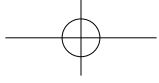
西日本製紙坂本工場前を行く稚児さん行列
撮影年月日不明、坂本
撮影：東儀一郎氏
Children parading for the religious ceremony
passing the Sakamoto Factory of Nishi Nippon
Paper Industry.
Sakamoto, date unknown
Photo : Giichiro Higashi





渡し船で瀬戸石駅へ向かい通勤する様子
昭和61年4月30日、瀬戸石
撮影：東儀一郎氏
Commuting to the Setoishi station by boat.
Setoishi, April 30, 1986
Photo : Giichiro Higashi

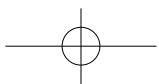


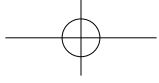


土木作業の女性たち
昭和 29 年 1 月
撮影：本村孝夫氏
Women in construction work.
January 1954
Photo : Takao Motomura



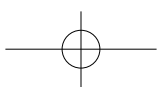
嵩上げ工事の現場にて
昭和 30 年 9 月 5 日、破木
撮影：本村孝夫氏
At a construction site to raise the riverbank.
Hagi, September 5, 1955
Photo : Takao Motomura

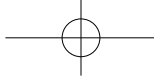




破木から葉木を背に友人と
昭和28年8月31日、破木
撮影：本村孝夫氏

Friends, in front of Hagi and Haki.
Hagi, August 31, 1953
Photo : Takao Motomura





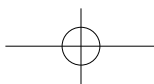
荒瀬のすぐ上流で舟を漕ぐ
昭和 27 年頃

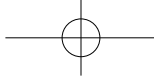
撮影：本村孝夫氏

Rowing a boat at the upper stream near Arase.

Around 1952

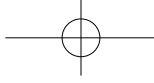
Photo : Takao Motomura



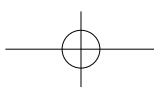


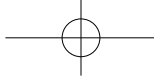
葉木橋のない頃、破木－葉木の渡し船
現在の百済来川合流地点、右岸は219号線
昭和32年12月17日、破木
撮影：本村孝夫氏

A boat for transportation between Hagi and Haki
before Haki Bridge was built. The place is the
current juncture of Kutaragi river, Route 219 on
the right bank.
Hagi, December 17, 1957
Photo : Takao Motomura

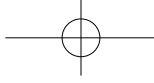


支流の百済来川氾濫
昭和29年7月、破木
撮影：本村孝夫氏
Flood at a branch of the Kutaragi River.
Hagi, July 1954
Photo: Takao Motomura





ダム建設に伴い、沈みゆく風景
昭和30年2月6日、破木
撮影者：本村孝夫氏
Sinking land at the dam construction.
Hagi, February 6, 1955
Photo : Takao Motomura

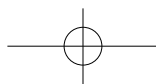


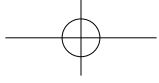
県道側の JR 肥薩線線路上から見える坂本の町
撮影年月日不明、坂本
撮影：東儀一郎氏

Sakamoto Town from the JR Hisatsu railway bridge at
the Prefectural Route.
Sakamoto, date unknown
Photo : Giichiro Higashi

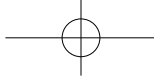


昭和50年代の水害
撮影年月日・場所不明
撮影：東儀一郎氏
Flood in the 1970s.
Site unknown, date unknown
Photo : Giichiro Higashi

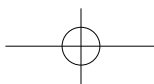


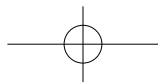
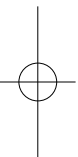
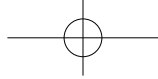


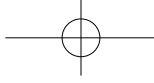
昭和50年代の水害
撮影年月日・場所不明
撮影：東儀一郎氏
Flood in the 1970s.
Site unknown, date unknown
Photo : Giichiro Higashi



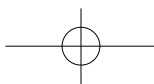
昭和 50 年代の水害
撮影年月日・場所不明
撮影：東儀一郎氏
Flood in the 1970s.
Site unknown, date unknown
Photo : Giichiro Higashi

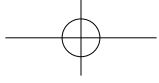






瀬渡しの木舟
撮影年月日不明、瀬戸石
撮影：東儀一郎氏
A wood boat for transportation.
Setoishi, date unknown
Photo : Giichiro Higashi





球磨川を泳ぐ鯉のぼりと深水発電所

豪雨にて流出

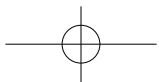
昭和61年4月、深水

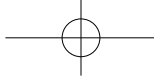
撮影：東儀一郎氏

Carp streamers on the Kuma River and the Hukami power generator,
which swept away by the flood.

Hukami, April 1986

Photo : Giichiro Higashi



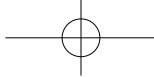


百済来川の球磨川合流地点で川遊びをする子供たち
昭和28年8月25日、破木

撮影：本村孝夫氏

Children playing at the juncture of the Kuma and the Kutaragi.
Around Hagi, August 25, 1953

Photo : Takao Motomura



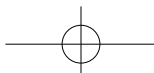
葉木を背に自慢のバイクで
昭和28年9月2日、破木
撮影：本村孝夫氏

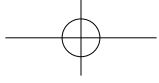
With his favorite bike, in front of Hagi.
Hagi, September 2, 1953
Photo : Takao Motomura



温泉のように浸かる技師ら
昭和28年7月7日、破木
撮影：本村孝夫氏

Engineers soaking in the river like a hot spring.
Hagi, July 7, 1953
Photo : Takao Motomura

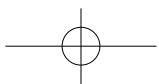


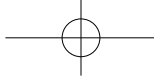


子供をあやしながら家族写真
昭和28年5月24～26日、破木
撮影：本村孝夫氏
Family photo, dandling a child.
Hagi, May 24 to 26, 1953
Photo : Takao Motomura



近所の子供たち
昭和28年8月25日、破木
撮影：本村孝夫氏
The neighborhood children.
Hagi, August 25, 1953
Photo : Takao Motomura





球磨川で木船に乗り釣りする一連

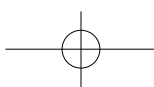
撮影年不明 7月28日

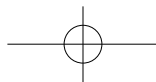
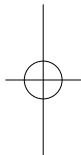
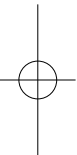
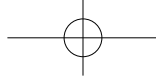
撮影：東儀一郎氏

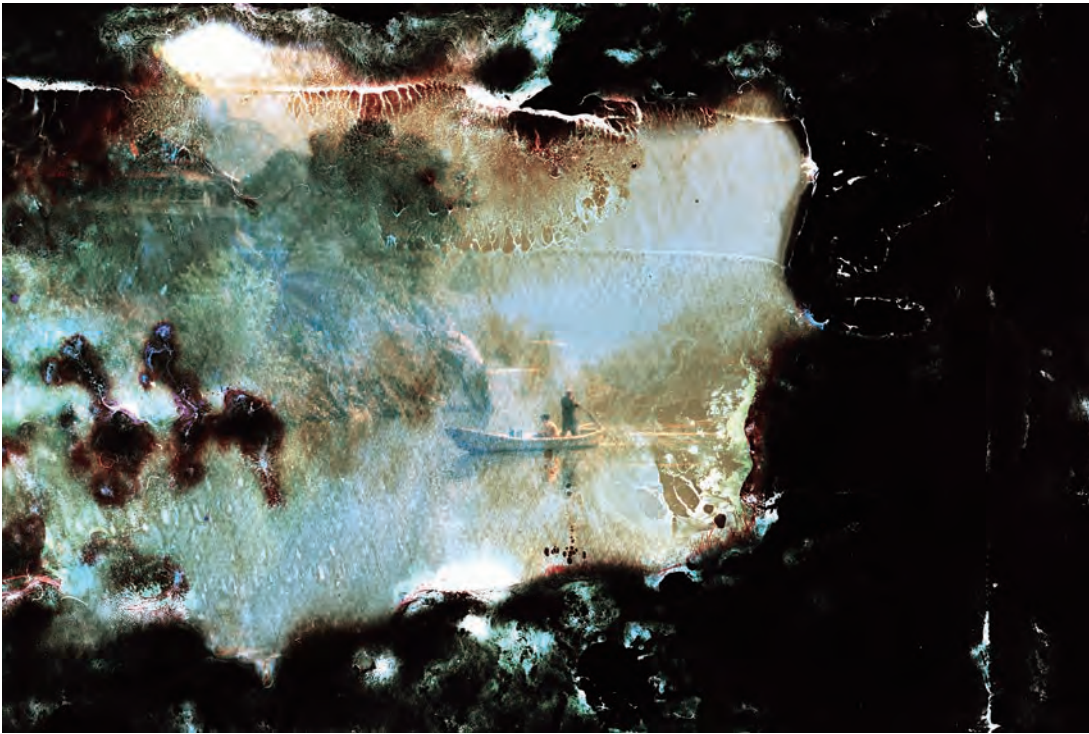
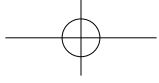
A series of fishing on a wooden boat at the Kuma River.

July 28, year unknown

Photo : Giichiro Higashi



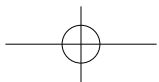


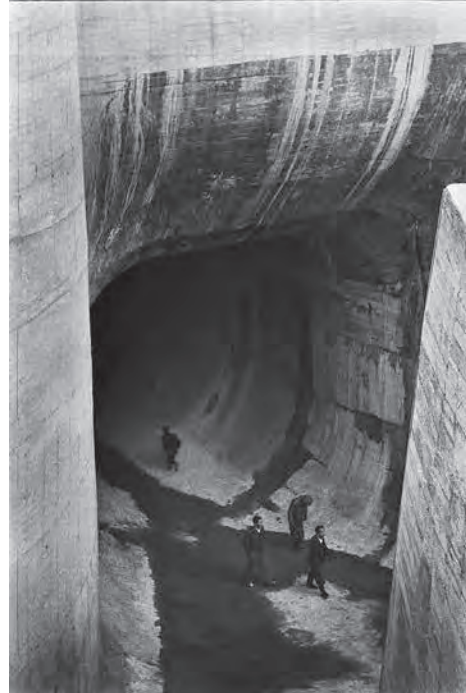
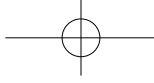


撮影年月日不明、瀬戸石
撮影：東儀一郎氏
Setoishi, date unknown
Photo : Giichiro Higashi

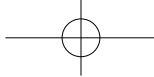


春の峯苔病院
2階部分まで浸水し解体予定
平成4年3月30日、坂本
撮影者：東儀一郎氏
Minetoma Hospital in spring, planned
to be dismantled because of the flood.
Sakamoto, March 30, 1992
Photo : Giichiro Higashi

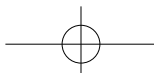


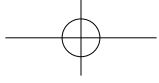


ダム運転前の見学旅行
昭和29年、荒瀬
撮影：本村孝夫氏
An observation tour of the dam before its
operation.
Arase, date unknown
Photo : Takao Motomura



仕事を終え、当時の 219 号線を仲間と帰路につく
昭和 29 年 11 月、破木
撮影：本村孝夫氏
Going home after work with colleagues from Route 219.
November 1954, Hagi
Photo : Takao Motomura





干し柿と冬晴れの日常

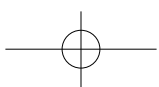
昭和 29 年 12 月 7 日

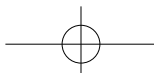
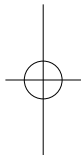
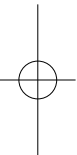
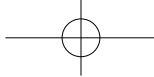
撮影：本村孝夫氏

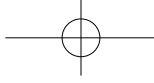
A scene in winter, under dried persimmons.

December 7, 1954

Photo : Takao Motomura

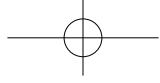






右岸の山腹より
球磨川と浮かぶダム湖観光のボンボン船
昭和 29 年 12 月 27 日
撮影：本村孝夫氏

A sightseeing steamboat on the reservoir, from a
mountain at the right bank.
December 27, 1954
Photo : Takao Motomura

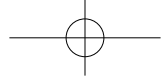


山と川と坂本町

八代市坂本町は、1961(昭和36)年に、八代郡上松求麻村、下松求麻村、芦北郡百済来村が合併して熊本県八代郡坂本村になった。その後、2005(平成17)年に八代市と合併し、現在の熊本県八代市坂本町となる。約9割が山林で、ほぼ町の中央を南から北に球磨川が流れている。その両岸から12の支流が球磨川に注ぐ、水の豊富な土地だ。川では、鮎や鰻などの漁が盛んだった。一方、その自然環境は、人の日々の営みの中では厳しいものでもあった。山を利用した焼畑耕作、球磨川の急流を利用した舟運や筏流しなどの自然を相手にした生活は、容易

ではなかったのではないだろうか。

今回掲載した写真の中に、1954(昭和29)年の荒瀬ダム完成直後、ダム湖左岸で陸揚げされる球磨川流域最後の筏流しの様子が含まれていた。1908(明治41)年に八代一人吉間の鉄道(肥薩線)の開通、荒瀬ダム完成を経て、最後に今の国道219号線が開通したことにより、舟運は終わりを迎え、人々の生活は変化をしていった。変化や終焉を迎えたのは人だけではない。川と海を自由に行き来する回遊性の魚、綺麗な水質に棲む魚などが減り、川とともにある暮らしにも大きな変化を与えた。



「球磨川の水の出んば、ナガシャアガラン」

(球磨川の水が出なければ梅雨はあがらない)

旧・坂本村最古の水害の記録は1539(天文8)年。その後、幾度となく起きる水害の度に球磨川周辺の嵩上げ工事は繰り返されてきた。しかし、今回の2020(令和2)年7月に起きた水害は、その想定を遥かに超え、場所によって予想の4～8mを超えた水位で川沿いの町を襲った。

上の言葉は、昔から梅雨時期には言われた言葉だそうだ。球磨川河口から不知火海を挟み遠く対岸にある天草の漁師ですら、海の濁りで球磨川の増水の程度がわかったのだという。「大水のたびゴデ新開はツカル」(洪水のたびに新開付近は浸かる)と坂本村史にもある通り、元々年に1回は洪水に見舞われた。まだ荒瀬ダムのない時代、大雨が降っても水位の上昇は穏やかだった。それに慣れていたこともあり、それぞれが備え、被害は少なかったという。球磨川本来の大水は、害よりも恵あり、「水害」という言葉はなかったのだと話を聞いた。

球磨川は、その水の豊富さで生活そのものはもとより、山を、畑を、産業を潤す重要な存在である。同時に、坂本と球磨川の水害の歴史は切っても切り離せないものがあるだろう。しかし、それ以上にその大雨は肥えた土を抱えて海へ注ぎ、不知火海という九州に囲まれた小さな海にも重要な存在だったのではないだろうか。

今回のREBORNプロジェクトの中で、使用している本村氏、東氏の写真にもそれぞれ年代や地域は違うが水害を記録したカットがあり、共に貴重な資料である。

西日本製紙工場と荒瀬ダム

球磨川や支流の豊富な水資源や森林資源を利用して、九州で初めての製紙会社が作られることとなった。1898(明治31)年、「東肥製紙工場」が旧坂本村に設立。その後、1926(大正15)年「樺太工業株式会社」、1965(昭和40)年「十條製紙株式会社」、1967(昭和42)年「西日本製紙」と変遷したが、1988(昭和63)年に解散し、100年近く続いた紙漉工場の歴史は幕を閉じた。工場跡は現在、ワイワイパークとなっている。2021年1月現在も、被災ゴミ中間集積分別の拠点として活用されているが、地域住民は再び家族連れや子供の姿があふれる景色を心待ちにしている。

もう一つ、球磨川の水資源を利用して作られたのが、荒瀬ダム・藤本発電所の建設だ。「球磨川地域総合開発計画」の1つとして、戦後の電力需要に応えるかたちで発電専用ダムとして1954(昭和29)年12月に発電を開始した。1966(昭和41)年頃より地元住民や漁民による水害激化対策と環境改善の目的による撤去要望の働きかけを受け、紆余曲折を経たが、2018(平成30)年に日本で初めてとなるダム撤去工事が完了した。撤去後は水質が回復し、少しずつではあるが水辺の生き物が戻り、その回復の影響は海辺の暮らしまで続いている。

一方、林業の盛況と並行し、製紙工場進出やダム建設などを背景に経済的にも活気があった。さらに、製紙工場勤務者のサークル等の文化的活動との相乗効果で、まだ一般的には高価で普及率も低かったこの時代にカメラの所有率が高く、多くのカメラマンによる記録写真が残る地域でもあった。

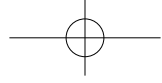
今回、このプロジェクトでは、お二人の撮影者が確認された。一人目は東儀一郎氏。八代市に住んでいた東氏は人吉-八代の広い範囲を撮影しており、いつもバイクで撮影に回る姿を目撃されていた。二人目は本村孝夫氏。破木集落で父が床屋をしており、終戦後、警察予備隊を経て、理容師学校へ入学。北九州へ移り床屋をしていた。現在も北九州に在住。撮影当時は破木の自宅で暗室作業を行っていた。

参考文献

- ・坂本村史編纂委員会編『坂本村史』坂本村史編纂委員会、1990年、「洪水」p541-、「山と川に生きるムラ概要」p977-等。
- ・前山光則『球磨川物語』葦書房、1997年
- ・つる祥子「球磨川・荒瀬ダム撤去がもたらしたもの」つり人 online 環境レポート、2020年11月27日掲載



撮影者の本村孝夫氏



10年、そしてこれから

Reborn リバーガイド 溝口隼平

豊かな川が好きで、坂本に移住してきた。昨日のことのようだが、今年でもう10年となる。なぜ坂本だったのか。川と人との関係が色濃く残り、なおダム撤去でさらなる豊かさを取り戻そうとしている人々に興味を持ったからである。球磨川が支えていた川との生活全般が、私の興味範囲であった。

移住後の生業の軸に漁師を据えていたが、家族を支えるだけの水揚げが見込める資源量と腕を期待することはどうやら難しく、先にリバーガイドとなった。そして季節仕事の穴埋めをするために多様な仕事を経て冬、林業に携わることになった。川とともに移り行く風景を撮り、過去の記憶や記録を掘り起こし、集めることで坂本の歴史を追体験しながら生活していたのである。川や山の仕事に就くことで、初めて文中の記録の意味が通じ追体験を想像することが可能になる面白みを幾度も味わったものである。坂本や球磨川流域の多くの方々に支えられていた実に豊かな10年であった。

住みながら、集められる郷土資料は求め、残された記録写真は可能な限り収集していた。将来、今よりもさらに川の豊かさを取り戻す時のために、豊かさの戻り先を明確にして共有しておきたいと思っていたからである。私たちの世代はたったの二世代上の方々が味わっていた自然の豊かさすら体感することが難しく、子や孫の世代はさらに困難になっているとの切迫感がその背景にあった。そして、集めた資料や写真、体験談から浮き彫りに



© Mitsutoshi Kasai

なる球磨川の失われた豊かさと、取り戻せるかもしれない可能性にただただ魅了されていたのだ。

大水が出たら坂本の人たちは基本浮足立つ。被害の前に豊かさがあるからだ。増水する中、多くの人たちが、川岸に魚をねらった「濁りすくい」に出ている。大水と水害に明らかな違いがあるのである。皆、家の近くの増水した時の漁場を持っていた。昼夜問わず水位を眺める生活である。どの家にも大きな網があり、モクズガニを獲るガネ籠があり、釣り竿がある。現在、自家用車を持つような感覚で川舟を持ち、自転車に乗るような手軽さで櫂や竿を操ることが出来る人たちの暮らしがほんの数世代前までであった土地なのである。そして、昭和40年57年の水害だけではなく、多くの水害を乗り越えて高台移転や水害対策を繰り返してきた土地でもあった。川が生活に近いのだ。その上で川を生活の場として選び続けてきている人たちなのである。

初夏には川を眺める人が増え、夏は川の隅々に人の気配を感じ、キンモクセイの香りがする頃には落ち鮎を狙う漁師が動き出す。そういう川とともにある風景は、日本中の多くの川で文献の中に閉じ込められていくのみであった。

坂本は違った。ダム湖に沈んでいる瀬で釣りをしたいとの思いを叶えた人たちがいたのである。川と人との関係を再構築しようとする人たちの情熱が伝わる土地柄



© Yuuki Toyoda

なのだ。

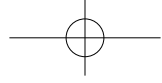
そういう人たちに支えられながら、失われていく豊かな川を、取り戻せる豊かな川へと認識を変える人を増やす事をミッションとした会社を4年前に立ち上げた。ラフティングボートに乗り、2時間ほど一緒に過ごすのだ。歴史と文化、生業と豊かさを遊びの中に織り交ぜて、取り戻したい豊かさを共有するチームを構築する仕組みを作りたい、豊かさを失わせている問題や課題を解決するための生業を担う人を巻き込むのだと、ただ息巻いていたように思う。お客様がファンに変わり、志同じくするチームが変わっていく様を見て、走り続けることができた。そして自宅に集めた資料の多くは、走り続ける私に賛同していただいた方々が託してくれた大事な坂本の資産であり、それがそのまま観光資源やガイドの装備となっていた。

7月3日深夜、荒天時の穴埋めのための請け仕事であった流速調査に出た。家族を残し大水時家を空ける仕事であった。調査先の上流から、とてつもないスピードで上がり続ける水に驚き、残した家族に避難するように電話を入れた。しかし、それでも間に合わなかった。家族は逃げ遅れ垂直避難を余儀なくされ、最終的に自衛隊のヘリで救出された。既往最大水量を軽く4~9mは超えてきた今回の水害は、過去最短のスピードで水位が上がっていて、これまでの常識を大きく超える水害となった。家族が無事、それがただただ幸運であった。しかし仕事

場として借りていた瀬戸石駅前の家、瀬戸石ベースは完全流失し仕事道具、資料全てが球磨川に消えていった。鉄筋コンクリート3階建ての自宅兼事務所であった荒瀬ベースは、2F天井まで水位が上がり、家財の残存率7割となったがほぼすべてのものが水没し、その水没家財の中に、預かりものの大事な写真資料があった。

被災翌日の7月5日、縁あって民間レスキューヘリのパイロットをガイドする機会を頂き、空から被災状況を見る事となった。ただ嘔然としそして絶望した。そして何が出来るかを考えた。数日後、10年間やってきた方向性で変わらず進めばいいと、ふと気がついて驚くほど楽になった。すこしばかり水害被害でスタート地点が逆行したけれども、人と自然との関係を再構築していく方向性そのものは何も変わらない。漁業や林業を取り入れながら、よりよい形を模索していく事を変わず続けるだけであると。

失ったと思われたこの写真を集めた写真集は、その象徴のように思っている。多くの喪失感を味わいながらも前を向いて歩む被災者の方に、何かを届けられるかもしれない、そう思える事が本当にありがたい。多くの方に手を差し伸べて頂き、多くの方と共に再生していく、この希望を生むプロジェクトにただただ感謝をしている。



水損ネガクリーニング作業報告

令和2年7月豪雨で水損した八代市坂本町の古い写真ネガをレスキューする「REBORN プロジェクト」の実施においては、写真家・豊田有希の声がけて、熊本のカメラマンやクリエイター、学芸員等が、ボランティアグループ「あめつち」を結成し、その活動にあたってきた。

その活動は、①水損ネガのクリーニングと保存及びデジタル化、②プリント写真の展示及び記録集の発行を大きな柱としている。



①水損ネガのクリーニングと保存及びデジタル化作業

水損ネガのクリーニングにあたって、頭を悩ませたのがコロナ禍における作業の実施であった。水損資料のレスキューにあたってはスピードが重視されるが、泥付きの資料自体が汚染されている可能性と、またスタッフが同一空間で作業することによる感染拡大を防ぐために、「換気のできる広い空間の確保」「検温・手洗い・消毒の徹底と手袋・マスク等の着用」「作業スタッフの人数制限」を念頭において、つなぎ美術館と熊本市現代美術館を主会場に、以下の活動を行った。

まず、水損資料の全貌を把握するために、水没し固着した状態だったDP袋を小分けにし、中にあるネガやプリントをリスト化する作業を行った。水損資料取扱い経験のある学芸員と協議しながら、○（画像がほぼ残っているもの）、△（一部画像が残っているもの）、×（画像が残っていないもの）と判定を行いながら、袋に入った資料の状態を撮影し、全体の個数や、DP袋に記入された情報を読み取り、全体のリスト化を行った。並行して、水の入ったスリーブを開封して、水や汚れを落とし乾燥させ、反りやカビが

でないように、中性紙をはさんで保存した。

資料内容としては、6×6ネガフィルム114本、35mmネガフィルム78本、6×4.5ネガフィルムがバラで2本分程、紙資料が11枚を確認。木箱に入り水損していた内容に関しては、画像が半分以上残っているものが54本、一部残っているものが28本、ほとんど残っていないものが25本であった。DP袋に同封されたプリント写真は、すべて画像が流されていた。もう一つ、水没しなかった小型コンテナボックスが1箱あった。そのボックスの状態は、浸水したとみられる水損は外側4本で、その他は経年劣化と水損時の湿気は見られたものの大きなダメージは見られなかった。

本来、水損紙資料のレスキューは48時間以内とされるが、本作業においては、ボランティア作業であること、またコロナ禍でその後の作業環境に予測がつかなかったため、3日間で「できることを、できるしこ」行うにとどめた。その後、水損ネガ及びプリントのデジタル化作業を行い、延べ2167カットをデータ化した。

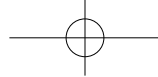


②プリント写真の展示及び記録集の発行

川を中心とする記憶の継承・共有を目的とする本活動では、プリント写真の展示及び記録集の発行を計画している。幸いなことに、2カ所から活動資金の助成を得ることができ、水損ネガの実物及びプリント等の展示を熊本県内で順次行う予定だ。また、坂本町では被災された住民の方々が仮設住宅や町外へ住むことを余儀なくされていることから、坂本町へ帰るきっかけ作りや会話の種となるように、坂本町での展示も計画している。それにあわせて、本記録集の編集・発行準備を行ってきた。本誌は、坂本町民の方に無料配布するほか、ドネーションブックとして一般販売し、その収益を「Reborn」を通して、町の復興に寄付する予定である。

今回のボランティア活動は民間ベースで、人や時間、予算に限りがあり、本来であれば、もっと多くの資料をレスキューできたのはという反省点も多数ある。しかし、今回得たノウハウやネットワークを、今後起こり得る災害において、写真を中心とする文化的資料が被害にあった際に活用できればと考えている。





おわりに

まず初めに、この活動にご理解、ご協力をいただき写真掲載の許可をくださいました、故・東儀一郎氏、本村孝夫氏のご親族の方々に、心より感謝申し上げます。

今回掲載した写真の中にはポートレートを数多く含んでおり、一部許可をいただけたものもあります。しかし、半世紀以上前の写真も多数あるため、全ての人物の特定・許可を得ることはできませんでした。先に、お詫び申し上げます。

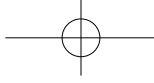
現在はネガのクリーニング、デジタル化、保存袋の入れ替えなどが完了し、これから更に写っている人物や場所、事象を探究していきます。順次、坂本町を始め、町外でも展示を行っていく予定です。

もしご本人、ご親族、お知り合いの方など写っておられた際は、お手数ですがご連絡いただけますと幸いです。写真や本誌を責任持ってお届けしたいと思っています。

また、今回のこの取り組みを入り口とし、今回の水害について、かつて、そして今の球磨川を中心とした暮らし、風習などの聞き書きや撮影など、広げていき今後につなげていきたいと考えています。

本記録集に掲載する写真の復元及び本記録集の編集は、日本財団及び熊本放送文化振興財団からの助成金を受けて実施し、坂本町の方々へは無償で配布しています。

また、ドネーションブックとして販売した本誌の売り上げは、書店販売などの販売手数料および必要経費を除き、災害直後より坂本町のために動き回り活動を続けている Reborn リバーガイド・溝口隼平氏を通して、同町の復興活動に寄付することとします。

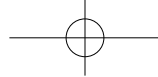


荒瀬ダムが川のほぼ全ての水を取水していた時代、陸地化した川底に子供たちが通学で使う道があった。荒瀬ダム撤去とともにこの橋も撤去され、今では川の流れが戻っている。

撮影年月日不明 撮影：東儀一郎氏

A bridge for children to go to elementary school at the ground appearing on the former riverbed because the dam took most of the water, was disappeared at the dam removal and river stream returned.

Date unknown Photo : Giichiro Higashi



撮影日不明、葉木
坂本道の駅（荒瀬）対岸より上流
撮影：東義一郎氏
From the upper stream of the opposite bank of
Michi no Eki Sakamoto in Arase.
Haki, date unknown
Photo : Giichiro Higashi



あとがき

今回、令和2年7月23日に初めて豪雨後の坂本町を訪ねました。

川に沿い、山に沿って、少しずつ違った表情を持つ集落の数々。その緩やかな時間の流れを眺めるのが好きで時折通りかかっていた場所は、7月4日を境に橋は流失、219号線の両脇には家財や泥、水没した車までもがそのまま、人気はなく言葉を失うほど変わり果てていました。

以前より繋がりのあったRebornの溝口氏の荒瀬ベースを尋ねると、2階まで浸水、屋内も泥が積もった現実を目の当たりにしました。この時、本業である写真のことであれば預かったのが今回本に掲載した写真たちです。東氏のネガは木箱に入り、水や泥が侵入した状態。本村氏のネガは幸いにも密閉の容器に入っており、湿気はあるものの大きな水損はみられませんでした。

早速自宅では箱の中を確認していくと、水はネガ袋にまで進入し、溶けた乳剤と泥が混じり、異臭を放っていました。時間の猶予や一人での作業は難しいと判断。翌日SNSで“加勢”を呼びかけたところ、思った以上に協力の声を掛けて下さった方々があり、作業を進めることができました。ご協力いただいた方々は、最後に記載させていただきましたが、人手の“加勢”はもちろん、場所の提供、経験者のノウハウの提供、多くの方々のご協力に深く感謝申し上げます。

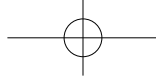
その後、これを書いている今は水害から半年が立ちました。以前より少しずつですが坂本町へ行き、坂本の方々と話す機会も増えました。その中で、坂本に帰れる場所や機会を作る動きや、地元坂本町のためにと動き回る若

手の方々にもお会いしました。川と人との間に流れる時間は、内面までも澄ましていくのではないだろうか、と感じ、その視点から私自身、学ぶことは多いように思いました。そして作業を進める中で、徐々に明らかになる写真群。そこに写っていたのは、何気ないポートレートや球磨川の釣り人、浮かぶ木舟、懐かしいようで今は見ることのできない風景の数々でした。気の遠くなるはずの作業も、写真を見ることが楽しくて時間が早く感じました。次第に、このまま眠らせるのは勿体ない、この写真を共有したい、なおかつ溝口氏の活動に繋がれば、と何かそれらが循環する方法はないものかと悩んでいたときに思いついたのがこの本を作ることでした。

「現在」という地点にいる私たちはなかなか気づけないかもしれません。撮影をした直後は、撮影者本人の意図や感情が写り込み、撮った動機こそ様々だと思います。

しかし、10年20年…50年…と時間が経つほどに、時間とともに眠っていく写真が大半だと思います。それと反対に残っていく写真は撮り手の思惑や手から離れ、写真が一人で歩き出し、やがては土地の記憶となり静かに息を続けるのではないかと私は思っています。今回、水害が暮らしの中から奪っていったものは計り知れないでしょう。その一方、これらの写真は、そのことで地域の記録写真、歴史的資料としての重要性を共有する機会に繋がられたと思っています。最後になりますが、豪雨で被災した坂本町をはじめ多くの地域が元の日常に戻る日を想い、そして私たちはどう進んでいくか、それぞれができることをできる分、少しずつ考え進んでいけたらと思います。

2021年2月1日 豊田有希



令和2年7月豪雨 REBORN プロジェクト

REBORN project, the heavy rain in July, 2020

編集：豊田 有希

Editor : Yuuki Toyoda

執筆：豊田 有希 溝口 隼平 坂本 顕子

Writers : Yuuki Toyoda Junpei Mizoguchi Akiko Sakamoto

デザイン：石井 克昌

Designer : Yoshimasa Ishii

翻訳：小泉 初恵

Translator : Hatsue Koizumi

助成：日本財団 熊本放送文化振興財団

Funded by the Nippon Foundation,
and The Culture Promotion Foundation of Kumamoto Broadcasting Co., Ltd.

発行日：2021年2月1日

Published in February 1, 2021

発行者：ボランティアグループあめつち

Published by Volunteer Group Ametsuchi

豊田 有希 yuukitoyoda.08@gmail.com

Yuuki Toyoda www.yuukitoyoda.com

SPECIAL THANKS TO

山下 すず子 (東儀一郎氏のご親族)	Suzuko Yamashita (Giichiro Higashi's family)
早田 由美子 (本村孝夫氏のご親族)	Yumiko Hayata (Takao Motomura's family)
坂本 顕子	Akiko Sakamoto
石井 克昌	Yoshimasa Ishii
村口 森恵	Morie Muraguchi
高平 雅由	Masayoshi Takahira
木下 雅子	Masako Kinoshita
森田 具海	Hiromi Morita
高木 薫	Sumire Takagi
矢野 亜希子	Akiko Yano
岡松 トモキ	Tomoki Okamatsu
平田 克広	Katsuhiko Hirata
馬原 幸代	Sachiyo Mahara
三島 里奈	Rina Mishima
横手 真理	Mari Yokote
清水 貴美代	Kimiyo Shimizu
山口 亜希子	Akiko Yamaguchi
井上 昌子	Masako Inoue
末永 真由	Mayu Suenaga
小泉 初恵	Hatsue Koizumi
笠井 光俊	Mitsutoshi Kasai
坂本 桃子	Momoko Sakamoto



表紙写真：東儀一郎氏

Cover Photo : Giichiro Higashi

本書の無断転写、転載、複製を禁じます

All right reserved. No part of this book may be copied, reprinted or reproduced without permission.

